

シャフリサブズ「フジウム」 芸術製品工場について

ソ連期ウズベキスタンにおける手工業の集団化と女性の労働

宗野 ふもと

北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター非常勤研究員

1. はじめに

本研究は、ウズベキスタン都市部における手工業の社会主義的生産体制への改編過程を、カシュカダリヤ州シャフリサブズ市に存在した「フジウム」芸術製品工場 (*Shahrisabz «Hujum» badiiy buyumlar fabrikasi/u*¹⁾、以下「フジウム」と記載) の設立と発展に着目して明らかにする。これを通して、ソ連期における手工業の集団化と、女性「解放」の実態を明らかにしたい。現段階では十分な先行研究検討、資料収集、考察ができていないので、本稿は上記研究の中間報告としたい。本稿では、シャフリサブズ「フジウム」芸術工場はいかなる経緯で設立し発展したのか、どのような人々が働いていたのかという点について、これまでの研究で明らかになったことをまとめる。

「フジウム」は、1928年から2006年にかけて存在した、刺繍製品や絨毯その他衣類などを生産する生産組合 (*artel'/r*) であり工場 (*fabrika/r*) である。構成員の大多数は女性だった。「フジウム」は2006年に倒産するが、その後「フジウム」の元労働者たちは市内各所で工房を経営しはじめた。シャフリサブズにはティムール朝期に建設された歴史建造物があり、国内外から観光客が訪れる。工房では、主に観光客向けの土産物が生産されている。筆者がフィールドワークをしていた2011年には、「フジウム」の建物を利用して、女性たちが手工芸品生産グループを立ち上げていた。グループの中心人物は、タシュケント世界言語大学でフランス語を学んだDさんである。Dさんは、フランス語を生かして海外でシャフリサブズの手工芸品を販売しようとしていた。Dさんは、叔母で元「フジウム」労働者のOさんからアドバイスを受けながら事業を進めていた。「フジウム」で培われた手工芸品生産の技術は、現在のシャフリサブズの手工芸品生産にも息づいている。

1) 以下文中、ウズベク語はアルファベット表記に/uロシア語は/rを付す。

本稿では、「フジウム」元労働者たちの語りと、公文書館所蔵資料、新聞などの刊行物資料を用いる。これらは、2010年4月～2011年11月に行われたフィールドワークで収集した。聞き取り調査では、元「フジウム」労働者10名(全員女性)から「フジウム」に関する話を自由に話してもらった(表1)。自由に話してもらう形式をとったのは、筆者は「フジウム」に関する知識が少なく、まずは元労働者にとって「フジウム」はどのような場所であり、「フジウム」での労働経験はどのようなものとして記憶されているのかを知ろうと考えたためである。刊行物は、聞き取りを行った際に元労働者たちが提供してくれたものである。また、カシュカダリヤ州シャフリサブズ地区国家文書館(*Qashqadaryo viloyati Shahrisabz tumani Davlat arxivi*)では、「シャフリサブズ『フジウム』芸術製品工場」(*Shahrisabz «Hujum» badiiy buyumlar fabrikasi*) (1942～1992年)の閲覧と撮影を行った。

2. 本研究の位置づけ

本研究の位置づけと意義について、関連する先行研究を挙げ明らかにしたい。

手工業の集団化に関する研究

「フジウム」設立当初はドゥッピ(*duppi/u*)²⁾という刺繍された民族帽子を中心とする刺繍製品が生産されていた(写真1)。

ソヴィエト民族学者のスーハレヴァ[Sukhareva 2006]によれば、19世紀後半から20世紀初頭には、刺繍縫いは報酬を貰って生産する女性が一部いたが、一般的には女性たちが家で親族や自らのために行う活動だったという。「フジウム」が設立されたことで、シャフリサブズでは刺繍縫いは、時期によって程度の

2) チュベチエイカ(*tyubetyeika/u*)、カルポック(*qalpoq/u*)とも言う。シャフリサブズ周辺の伝統的なドゥッピは全面に刺繍がされている。

表1 聞き取りをした人たち

名前	生年	働いた期間	聞き取り実施日	録音
Aさん	1922	1940年頃～77年頃	2011/10/18	○
Gさん	?	2002～2006年	2011/09/16	○
Lさん	1962	1980～2006年	2010/10/11	
Mさん	1941	1959年～1992年	2010/10/10	
Hさん	1959	1976年～1998年	2011/10/17	
Qさん	1962	1991年頃半年ほど	2010/9/20	
Oさん	1950	1965～2005年頃	2011/2/10	○
Sさん	1938	1956年～1981年	2011/4/20,10/17	○
Rさん	1963	1981年～2003年	2010/10/10	
ザイナブさん	1922	1936年頃から	2011/9/23	○

※ザイナブさんのみ新聞記事等で取り上げられていたため本名で記載する。



写真1 ドゥッピ

違いはあるものの、材料調達、生産量、流通が国家によって管理されるようになった。そして、「フジウム」に参加した女性たちは刺繍を縫うことで、対価として報酬をもらうようになっていった。

集団化に関する研究は、大規模かつ急激に行われ、生産構造のみならず社会構造にも大きな影響をもたらした農業分野において盛んに行われてきた。一方で、手工業の集団化に関する研究は数少ない。日本語や英語では、19世紀後半から1928年までのトルキスタン領とソ連中央アジア地域における手工業の社会経済変化に関するスカラルプ[Skallerup 1990]や、ウズベキスタン東部リシトン市の陶業の変遷に関する菊田[2013]の研究があるのみである。ゆえに、「フジウム」の設立と発展過程に着目することは、手工業集団化の新たな事例を提供するという意義を持つ。以下では、菊田[2013]の研究に依りながら手工業の集団化を研究する際のポイントを押さえておきたい。

菊田は、職工たちの間で行われるピール崇敬³⁾がソ連期にいかに変化したかという観点から、陶業の集団化に注目した。集団化以前には、それぞれの親方の工

3) イスラームにおける聖者崇敬。

房で行われていた陶器生産は、1941年頃までに徐々に生産組合や国営工場で行われるようになっていった(生産場所の限定)。1960年代になると機械化による作業の細分化や、見本市方式による均質な製品作りが行われるようになった。このことは、複雑な製法や伝統文様の衰退をもたらし、リシトン陶器の品質低下の原因となった。しかし、集団化以前に行われていた徒弟制による技術継承や生産活動は消滅することにはなかった。ピール崇敬も職人にとっての意味づけを変化させながら保持されていた。菊田は、社会主義的生産が行われていたとされる工場は「生産のための場」であった他「慣習の再生産の場」でもあったと述べる[菊田 2013: 202]。また、社会主義的生産体制は、前代の組織や制度などを利用しており、ソ連の産業構造は新旧入りまじったものであったとも述べている[菊田 2013: 207]。

「フジウム」の設立は、女性たちが家の中で家族や親せきなどの身内と行っていた刺繍縫いを、家の外で身内ではない女性たちと行い、報酬を得る活動になることを促すものだった。生産体制が変化したことで、女性たちの手工芸生産は、どのようなことが変化した、どのようなことが維持されたのか。

ソ連期ウズベキスタンの女性について

「フジウム」が設立された1920年代後半は、ソヴィエト連邦の中で「後進的」地域とみなされていた中央アジア地域では社会主義建設のための様々な改革が進められた。中でも、ソヴィエト政権は、中央アジアの定住民女性を、活動領域を家の中を主とすること、早婚、多妻婚、婚資などにより自由がないことを根拠として、最も抑圧された存在であると考えた。女性たちを抑圧的な慣習から解放することは、後進的な中央アジアにおける社会主義建設の大きな一歩となるとした。女性の解放は、労働力の確保という側面もあった。1919年には、女性部が設立された。モスクワより派遣された女性部の活動家たちは、各地を歩き現地女性たちを啓蒙して回ったという。1925年にはタシュケントで女性クラブが設立された。ここでは、現地女性のための現地語読み書き、職業訓練、医療相談、法律相談が行われていた。1927年には、「フジウム」と呼ばれる女性解放キャンペーンが中央アジアの各地で行われた。このキャンペーンは、女性の自由を阻むすべての悪しき伝統に攻撃を仕掛け、一掃することを目指して行われたもので、広場で女性たちがヴェールを取って

火にくべるという過激なパフォーマンスを伴うものだった。しかし「フジウム」には大きな犠牲が伴った。急激な変化に反発した現地住民（主に男性）による、ヴェールを取った女性への暴行が頻発したのである。

ソ連期における女性の「解放」は社会主義の進展を象徴するものであった。1930年代からは徐々に女性たちの社会進出は進んでいった。とりわけ、大祖国戦争で男性が戦場へ赴き労働の担い手が不足したことをきっかけとして、家の外で女性たちは働くようになった。ソ連期の女性の就業率などは、社会主義進展をはかる指標となっていた。しかし、実際には女性が就く職種には偏りがあり、職場では性別によって職位に差があったという[Keller 1998: 21]。家の外で仕事をするようになって、家事と育児の担い手は女性であり、女性は賃労働、家事、育児の三重負担を強いられるようになったとも言われる[Olcott 1991]。

しかし、筆者は女性たちがどのような労働環境で働いていたか、いかに家の外での労働と家事・育児を両立させていたのかという実態は、先行研究では十分に明らかになっていないように思う。本研究は、「フジウム」という一つの生産組織に着目する。「フジウム」の設立と発展過程を記述することは、手工芸品生産の変化を明らかにするだけでなく、女性の労働の実態を浮かび上がらせることにつながる。

以下では、ソ連期に手工芸品の生産がいかに変化したかを明らかにしながら、そのもとで、女性たちはいかに働いていたのか、家事・育児との両立をいかに実現させていたのかについて明らかにしたい。

3. シャフリサブズ 「フジウム」芸術製品工場の設立

「フジウム」は1928年の春に生産組合として設立された。菊田によれば、20世紀初頭には、裕福な親方と貧しい職人の階層分化が進んでいたりシトン市における陶業の改編は、生産手段の所有に関して格差をなくし階層分化を阻むこと、国家による製品調達を容易にすること、改編を通して公的イデオロギーにかなう社会の建設を目的として実施されたという[菊田 2013: 172-173]。「フジウム」設立時に生産の中心だった刺繍製品は、女性たちが家で作るものであり、陶業と比較して商品化は進んでおらず、生産においても階層分化は進んでいなかったと考えられる。では、「フジウム」の設立は何を目的としたものだったのだろうか。手がかりとなるのが、工場／生産組合の名前が「フ

ジウム」であること、前節で述べた1927年に実施された女性解放キャンペーンも「フジウム」と名付けられていたことである。両者の間に関連はあるのだろうか。以下に引用するのは、「フジウム」設立50周年となる1978年に当時の工場長が行った講演の抜粋である。

シャフリサブズ「フジウム」芸術工場50周年の饗宴のために、半世紀の道のりについて、工場長G. ザイルッディノヴァの講演

シャフリサブズでは、女性を自由へ解放する歴史は「フジウム」工場の歴史と固く結ばれている。(中略)

共産党、ソヴィエト、社会組織の多方面にわたる文化的、政治的成果は、社会主義建設の活動的建設者になった女性たちが、公衆の前で根本的な変化を生み出したことである。何千人の女性たちが次々にパラソルを火で燃やした。彼女たちの中から、女性の自由のために多くの闘争活動が現れた。この活動的な女性たちは、他の女性たちの間で説得をするという偉大な仕事をした。彼女たちは、自ら平等のために社会主義建設に参加した。町では女性のための生産組合の設立が始まった。

1928年の春に設立された芸術製品を生産する生産組合は、このように女性が働く工場の一つとなった。生産組合には、「フジウム」という名前が与えられた。この名前が与えられたのは、驚くべきことではなかった、勿論のこと。この時、女性を自由へ解放することを目の当たりにしていた「フジウム」委員会は勝利し続けていた。「フジウム」生産組合は、町の女性たちに自由をつくる中心の一つに変わったのだ。

[Qashqadaryo viloyati Shahrisabz tumani Davlat arxivi: F. 44, op. 1, d. 235, ll. 3-4]

この講演によると、シャフリサブズにおける女性解放の過程で、「フジウム」が設立されたことが見えてくる。キャンペーンとしてのフジウムの成果として、現地人の女性活動家たちが現れた。彼女たちは、女性が働くための生産組合を設立しはじめた。「フジウム」もこの時設立された生産組合の一つだったようだ。設立に関わったのは、サメドヴァ・ハムラオイ氏(Samedova Xamraoy)、エシヤンクローヴァ・リサラット氏(Eshonqulova Risolat)、フッラモヴァ・ハイリオイ氏(Xurramova Xayrioy)、ラフマティッラエヴァ・ムアッタル氏(Rahmatyllaeva Muattar)、ユヌソヴァ・ヒダヤト氏(Yunusova Xidoyat)、ハジャエヴァ・トゥルスノイ氏(Xojaeva Tursunoy)、ハムラエヴァ

イ・シャラファトホン氏 (Xamraevoy Sharofatxon) [Qashqadaryo viloyati Shahrisabz tumani Davlat arxivi: F. 44, op. 1, d. 178, l. 3]で、全員が女性である。元労働者のOさんやAさんによれば、設立に関わった女性たちはコムソモール⁴⁾となって「フジウム」を設立したという。しかし、詳しいことは不明である。「フジウム」設立の詳しい経緯について調査を継続し、設立の目的について明らかにしたい。

設立当時の「フジウム」を取り巻く状況はいかに語られているのだろうか。再び工場長の講演を引用する。

現在のコルホーズバザールの横で、バイから没収した住居の一つが生産組合⁵⁾に与えられた⁶⁾。女性たちが働いている部屋は、とても狭く、湿気があり、暗かった。それにはかまわず、女性たちは、自由な労働の楽しみを求めて、新しい生活を享受する仲間たちの列に並び、自らの労働で恵みを得ることを喜んでた。

元々、初期は、生産組合の仕事に参加する女性の数はそれほど多くなかった。しかし、活動家たちの、マハッラからマハッラを回り、家を訪ね、女性たちの間で教え、組織していった結果、生産組合に参加する働き手の数は徐々に増えていった。

[Qashqadaryo viloyati Shahrisabz tumani Davlat arxivi: F. 44, op. 1, d. 235, l. 4]

ここから、設立当初は「フジウム」に参加する女性は多くなかったことがわかる。しかし、「フジウム」は消滅せず、むしろ活動家たちの地道な活動によって「フジウム」に参加する女性が増えていった。

4. 発展の兆しと戦争

発展の兆し

1930年代終り頃になると、「フジウム」の経営は軌道に乗りだしたようである。再び工場長の講演を引用する。

4) 全ソ連邦レーニン共産主義青年同盟。1918年に設立。14歳から28歳の青年からなる。青年たちに共産主義と愛国主義教育を行い、共産党と国家の活動に積極的に参加させることを目的とする組織である。各種教育機関、企業、組織、ソフホーズ、コルホーズ、軍において基礎組織が存在し、共産党員の候補者を養成した[袴田 1993: 216]。

5) 「フジウム」のこと。

6) Aさんによれば、現在のシャフリサブズ・デフカン・バザールの向かいにあるハンマム（公衆浴場）の横（もしくは敷地内か）に作業場があったという。

「フジウム」生産組合の真の発展は、30年代の終りから40年代の初めにかけて始まった。この時期になり、キタブ、キタブ地区のヴァルガンザ、ナリモン、パランドラ村の何百人という女性たちが、創造的で有益な労働に参加した。1938年に、生産組合では新しい部門が開かれ、ドゥッピの他、ベルバグ、チャライ、キイクチャ（すべて男性の腰巻）や他の芸術製品の生産が開始された。1940年の終りには、さらに一部門を開設することとなり、製品の生産高は1935年のそれと比較して、二倍に増えた。時を同じくして、生産物の品目も増えた。

[Qashqadaryo viloyati Shahrisabz tumani Davlat arxivi: F. 44, op. 1, d. 235, l. 5]、※()内は筆者補足

キタブは、「フジウム」があるシャフリサブズ市の北8キロほどのところに位置する町である。キタブ地区は、行政区分の名前である。キタブ市には「3月8日」⁷⁾という生産組合が存在しており、この時期に「フジウム」の支部となったようである。ヴァルガンザ、ナリモン、パランドラのキタブ地区村落部にも支部が設立され、村落部の女性たちも「フジウム」に参加していった。「フジウム」に参加する女性は、都市部に限らず村落部にも広がりつつあった。

1936年には、「フジウム」は独自に準備した資金で移転した[Qashqadaryo viloyati Shahrisabz tumani Davlat arxivi: F. 44, op. 1, d. 178, l. 3]。写真2は移転先の2011年時点の様子である。写真2の樹（プラタナス）の下で「フジウム」構成員の女性たちがドゥッピをつくっていたと伝えられている。

また、同年には1973年まで工場長を務めることとなるムフリサ・ジャララヴァ氏 (Muhlisa Jaralova) が組合長に就任する。元労働者たちの間では、ジャララヴァ氏こそが「フジウム」の発展に最も貢献した人物であると認識されていた。1956年～1981年まで「フジウム」で働いたSさんと、1965年～2005年まで「フジウム」で働いたOさんによるジャララヴァ生産組合長／工場長評を紹介したい。

Sさんのジャララヴァ工場長評

(2011年4月20日)()内は筆者補足

筆者: (「フジウム」で働いていたのは)すべて女性だった?

S: 全員、女性だった。10人の男性がいた。労働者、会計係…何か、補給係、このようにすべて女性だった。

7) 3月8日は国際女性の日であり、キャンペーンとしての「フジウム」が開始された日である。



写真2 1936年の移転先(2011年撮影)



写真3 絨毯

筆者:工場長もですか?

S: 工場長も女性。28年頃から73年までは⁸⁾、ムフリサ・ジャララヴァが工場長だった。そのあと、(ジャララヴァ氏は)年金に出て行った(退職した)。

筆者:その人はどのような人ですか? あなたにとって。

S: あの人、とても良い女性だった。親切な、人に対して親切で、慎重深く、だれかの給料を食べない、誰かに対して非常に悪く言わない、とても慎重深くよい女性だった。まだまだ、私は超えていない。私の師匠。フフフ...

Oさんによるジャララヴァ工場長評 (2011年2月11日)()内は筆者補足

O: (略) 72年に新しい工場では、ジャララヴァ・ムフリサという、その人は、工場で長年働いた。そのあと65歳、70歳まで工場長をした。学ばなかったけれどとても賢い、とてもよい実地経験がある人。

筆者:その人はシャフリサブズの人ですか?

O: 元々シャフリサブズの人。今、私は今何を言いたいのかというと、その女性は私たちの師匠だということ。私を仕事へと引き込んだ女性。長年工場を「フジウム」と言った、その女性は。(「フジウム」は)3人の女性から2,400まで増えた。3人の女性から⁹⁾。私はいまでも望んでいる、この芸術工場をムフリサ・

ジャララヴァの名前を付けて「フジウム」芸術工場となるように希望している。(略)

しかし、ジャララヴァ生産組合長／工場長が、「フジウム」でどのような仕事をしたのかは明らかにできていない。公文書館資料によれば、彼女は設立当初のメンバーには入っておらず、どのような経緯で「フジウム」に参加したのかも不明である。「フジウム」の発展に尽力したこの人物に関しては、今後も親族への聞き取りや資料の読解を通して調べていきたい。

戦争について

大祖国戦争(第二次世界大戦)の下での総動員体制は、手工業の生産現場への女性の進出をうながした。たとえば、リシトン陶業の担い手は主に男性だが、男性は戦地へ赴いたために、女性や子供が生産組合に加わったという[菊田 2013: 178]。ザイナブさんの嫁によれば、「フジウム」は戦時中に発展したという。男性たちが不在となったために、女性たちは子供育てるために働く必要が生じた。そこで、「フジウム」で仕事をすることになったという。

5. 発展と拡大 ——「フジウム」の労働環境と思い出

「フジウム」の発展と拡大は、戦後も継続した。1959年には生産組合から工場に改変され、シャフリサブズ「フジウム」芸術製品工場となった。同年には絨毯部門が開設され、1960年にはミシン刺繍部門が開設された[Qashqadaryo viloyati Shahrisabz tumani Davlat arxivi: F. 44, op. 1, d. 178, l. 3]。

なお、1973年の資料には、「フジウム」には、絨毯部門、刺繍部門、ミシン刺繍部門、縫製部門、染色部門の

8) Sさんの記憶違いと思われる。公文書館資料によれば、1928年から1931年はハムラエヴァ・シャラファトホン氏、1931年から1932年はサファロヴァ・ナルジオイ氏(Safarova Narziyoy)、1931年から1936年はメリカヴァ・ヌスカ氏(Melikava Nuska)が生産組合長をつとめたところ[Qashqadaryo viloyati Shahrisabz tumani Davlat arxivi: F. 44, op. 1, d. 178, l. 3]。Aさんもジャララヴァ氏の前に数名組合長がいたと話していた。Aさんによれば、初代組合長(シャラファトホン氏のことか)はタシュケントから来たという。

9) 公文書館資料によれば、設立には7人の女性が関わったとされている。



写真4 ミシン刺繍

記載がある〔Qashqadaryo viloyati Shahrisabz tumani Davlat arxivi: F. 44, op. 1, d. 122, ll. 8-9〕。1972年には、新しい工場へ移転した。

構成員も増加していった。1947年には124人(うち女性121人)だった構成員数は、1965年(工場へ改編されて5年後)には740人(うち女性722人)、1973年(新工場へ移転後1年後)には、1,112人(うち女性1,074人)、最も構成員の多かった1984年には2,100人(うち女性2,002人)と増加した¹⁰⁾。

筆者が聞き取りを実施した元労働者たちは、1960年頃から1980年代にかけて「フジウム」で働いていた人たちが多くを占める。彼女たちはどのような環境の下で働いていたのか。聞き取りで得られた情報を中心にまとめてみたい。

給料について

ノルマは各部門で定められ、違いがあったという。例えば、絨毯部門では1日に35〜40センチ織るというノルマがあった。絨毯部門で働いていたMさんによれば、1日中織っていれば60、70センチ織れたので、ノルマをこなすのは難しくはなかったという。しかし、儀礼などがあって「フジウム」へ来られない人はノルマをこなせないこともあったらしい。

報酬は、ノルマ分に加えて生産した分が月給(半月ごとに貰うこともできたようである)として支払われたという。給料については、「他の仕事と比べてそんなものないものだった」というLさんの意見や、Sさんが、「足りていたし、十分だった。私たちの生活、家計には足していた。安かったんだ。すべての物が」(2011年4



写真5 1972年の移転先(2016年撮影、骨組みのみ残る)

月20日)と語るように、決して悪くはなかったようである。

労働時間と休日について

労働時間は、8時から17時までで、12時〜13時までが昼休みだったという。Sさんは昼休みになると自宅へ戻り昼食をとっていた。工場には食堂があったので食堂で昼食を食べる人もいたという。ミシン刺繍部門では、17時〜0時までの労働時間もあった。Rさんは1985年に結婚するまでは17時〜0時の時間帯で働いていた。送迎バスがあったので、家が遠かったり夜遅かったりしても困ることはなかったという。休日は、土曜日と日曜日だった。Sさんによれば、平日家の仕事で忙しく働きに出てこれなければ、日曜日に働くこともできたそうである。

休息旅行

「フジウム」元労働者に限らず、ソ連時代に連邦内を旅行したという話を筆者はしばしば聞いた。ソ連時代は、連邦内の移動が格安だったこと、職場の特典で無料で旅行ができたことは、よい思い出として語られる。例えば、Aさんは休息旅行の思い出を以下のように話してくれた。

A：私は、いくつも外の国を回った。旅行へ。□□□□□
ほら。

O：その時は毎年旅行へ。バスで、お姉さん。

A：一番目はリノボトチ。二番目はコカンへ行って、宿舎に泊まって、三番目はアンディジャン、ナマンガンを回って、羊を一頭手に入れて、その後屠って、一晩中踊っていましたよ。

(聞き取りにはOさんも同席した。)

10) 出典は1947年から順に、Qashqadaryo viloyati Shahrisabz tumani Davlat arxivi: F. 44, op. 1, d. 21, l. 23; d. 203, l. 40; d. 121, l. 1; d. 264, l. 6。1986年以降は構成員数のデータなし。

1977年には、構成員313人がサナトリウムの利用、共和国内や連邦内の旅行、古い遺跡や博物館の日帰り見学をしている〔Qashqadaryo viloyati Shahrisabz tumani Davlat arxivi: F. 44, op. 1, d. 153, l. 58〕。

夜間学校

「フジウム」では未成年も働いていた。彼女らの多くは共産党やコムソモールとの関わりを持ち、90パーセントは中等専門教育、高等教育を受けたという〔Zaxarov 1979: 35〕。Oさんは、15歳で「フジウム」の労働者となり、夜間学校で学んだ後タシュケントの大学に進学した。彼女は夜間学校で学んでいた時のことを以下のように振り返る。

O: 5時に私たちは仕事を終えます。5時から9時まで夜間学校で勉強します。夜間学校へは私たちの家の前から近い。フジウムへ行った時は、このように学校へ行きます。隣人たちと帰ってきます。私の友達がいいます。二人で学びました。彼女も夜間学校で学びました。そして、二人で一緒に一つのグループで学び、一つの大学へ入りました。工場ではまだ誰も高等教育を受けた人はいなかった。

Oさんが述べるように、当時の「フジウム」では大学卒業の学歴を持つ人は限られていた。Oさんはおそらく幹部候補生だったのだろう。彼女曰く、工場長になれる機会もあったが、家族や健康問題でかなわなかったのだという。夜間学校で学んだのは、Oさんの様な有望な若者に限らなかった。Sさんによれば、夜間学校では若い人のほかに9年間しか教育を受けなかった人も学んでいたという。また、通常の労働時間は8時間だったが、夜間学生は7時間労働を認められていた。

6. どのような人が働いていたのか

前節までに、「フジウム」の設立と発展と1960年代から80年代の労働環境を見てきた。本節では、「フジウム」ではどのような人々がどのように働いていたのかを明らかにしたい。以下では、構成員を三つのタイプに分けそれぞれについて紹介する。

模範的労働者

筆者が聞き取り調査をした元労働者たちは、地区行

政庁から最後の工場長に抜擢されたGさんと、半年間だけ働いたというRさんを除いて、模範的労働者タイプだと思われる。彼女たちは、18歳前後で「フジウム」に参加し20年以上働いた。以下では、SさんとOさんがいかに「フジウム」で働き続けたか、働くことをいかに語っているかについて紹介したい。

Sさんについて

Sさんは1938年生まれで、1956年～1981年に「フジウム」工場で働いた。「フジウム」で働いた理由は、母親と祖母が「フジウム」の刺繍部門で働いていたからで、絨毯織りに興味があったからだという。はじめは絨毯部門で働き、1970年から絨毯部門の長となった。その後は「フジウム」の労働者委員会で工場の労働環境管理をする。1981年に引退した。1996年～2006年にかけてマハッラで役職に就いた。自分はよく働いたと認識しており、年金を多く貰っていることを誇りとしている。彼女は家事・育児と「フジウム」での労働をこなしていたこと、女性が家の外で仕事をするについて、次のように語っている。

2011年4月20日聞き取り。()内は筆者補足

筆者: 私の考えでは、ウズベク人女性は外で働くことよりも、家の仕事をするのが重要なので、他の場所で働くと言えば、大変にはならないのですか？

S: 以前はそうだった。いいえ、大変にはならない。ほら、例えば私は7人の子供を育てた。働いた。7人の子供は大学を卒業した学歴を持つ。(私たちは)彼らの家をつくった、場所をつくった。50年働いた。働くことを望めば働く。そして、全員(の女性)は仕事することを望まない。家で座って夫が見つけたものを食べる人もいる。彼らは少数で、多くの女性は働いている。多くの女性は働いて自分を守り、□□□□、何をするのか、働いている。今は、商売人になって働いている。自営の何かになって働いている。家で商売人になって働いている。今は、小・大ビジネスをするようになった。多くの女性たちは仕事をしている。マクタブで教師となって働く。病院などで働いている。オフィスの事務員として働いている。幼稚園、マクタブ、女性たちはたくさん。

筆者: このように働いている女性はすべて家の仕事を自分だけでするのですか？

S: 自分でもする。手伝う人がいれば手伝う。いなければ自分でする。

筆者:自分ですることはできるのですか？

S: 自分でできる。

筆者:家は大きいでしょう？

S: お手伝いはいなかった。自分ですべてしました。(これからSさん自身の過去を振り返る)
(中略)

筆者:旦那さんは手伝わなかったのですか？

S: いいえ。主人は、仕事がない時間は手伝っていた。車でリンゴを買ってきたり、ナヴァットを持って来たり。(家の外に)出て手伝っていた。

Sさんは、女性が家の外で仕事をすることは当然と考えていること、子供たち全員に高等教育を受けさせたことを誇りに思っているようだった。Sさんは「フジウム」で働きながら、家事・育児を一人でこなしたという。Sさんの様に、育児や家事をしながら「フジウム」で働いたという女性が多い。たとえば、Hさんは結婚当時は夫の実家に住んでおり、未婚の妹が二人いたため家の仕事は彼女らに手伝ってもらったという。また、Rさんは出産後一年間は休暇制度を利用して、その後は子供を工場の託児所に預けていたという。「フジウム」で働いていても、家事・育児を担うことは求められていたようである。Sさんのように一人でこなすこともあるが、身内の女性に手伝ってもらったり、工場内の託児所を利用したりして、「フジウム」での仕事と家事・育児を両立させていた。

次に、「フジウム」での労働が女性の経済的、社会的自立を実現させていた可能性を示す事例として、Oさんを紹介したい。すでに述べたように、Oさんは15歳で「フジウム」に参加し、夜間学校で学んだ。タシュケントの大学も卒業した。Oさんは、「フジウム」では絨毯、ミシン刺繍、縫製部門など、会計部門以外のすべての部門で働いた。彼女は「フジウム」に参加することを決めた理由を以下の様に語る。

2011年2月10日聞き取り()内は筆者補足

O: 若いころから織ることが好きだったのです。絨毯織りを希望した。家で、そしてカルポックを縫いました、マクタブに行く、カルポックを縫った。夜に縫った。その後、15歳から、絨毯に上がった。私はちょっとした娘だった。まだ年齢は達していなかった。この女性(ジャララヴァ氏)の前に来ました。そして私を採用した。そして絨毯を織りました、4年間。仕

事に対して絨毯織りに、学びに対しても関心を持ちました。繊維を学ばなければならないというものがあった後に。

次に、Oさんが「フジウム」での労働をいかに捉えているかについて、結婚生活との関わりから紹介したい。前節で述べた通り、彼女は大学に進学し卒業した。しかし在学中には胃の病気になり、学業を中断した。その後「フジウム」で働いていたため、学位を取ったのは28歳の時だった。

2011年2月10日聞き取り

筆者:いつ結婚したのですか？

O: 結婚？ 78年に結婚した。勉強を終えて28歳で結婚した。

筆者:遅くないのですか？

O: 遅い。もちろん遅い。でも、私は学位を取らなければならなかった。結婚すれば続けることができなかった。29歳で出産した。今は三人の息子と一人の娘がいる。79年に出産した。78年に結婚をして79年に出産した。

筆者:結婚をしてもフジウムで…

O: はい。フジウムで働いた。40年フジウムで働いた。

筆者:ご主人は許可を与えましたか？

O: はい。主人が許可を与えても与えなくても働いた。その主人は理解しなかった、学ばなかった。

姪のYさん曰く、Oさんの夫は「理解のない人」だったという。Oさんは、夫と離婚することになった。Oさんは、「フジウム」では54歳になるまで働き続けた。Oさんは、「フジウム」で働き続けたことを以下のように語った。

2011年2月10日聞き取り()内は筆者補足

O: 一つの場所で働かなければやっていけない。ここでは、困難があったとしても。そのためにも働かなければならない。力が必要、知識が必要、記憶が必要。皆が働くために。愛すれば、説明しないでしょう。そうでしょう？ この職業を愛した後は、説明できないですよ。やはり、また工場へ来ました。すでに年金に出ています。54歳で。60歳になって。8年、7年になりますか？ 7年間すでに私は年金(を受給している)ですが、頑張っています。そして彼女を(姪のYさん)を手伝わなければならない。彼女の代わりに走る

表2 構成員に占める在宅労働者の人数

	1957年	1969年	1973年	1974年	1977年	1980年	1982年	1983年	1984年
構成員数	343	1010	1112	1083	1246	1582	1743	1985	2100
うち女性数	318	990	1074	1043	1221	1509	1648	1892	2002
うち在宅労働者数	193	429	575	580	676	780	744	881	881

なければならない、ビジネスに関して。(略)

Oさんにとって「フジウム」で働くことはどのような意味を持っていたのだろうか。Oさんは、離婚後も「フジウム」で働いて子供たちを養った。「フジウム」での労働は、Oさんにとって生計を立てるために不可欠なものだっただろう。しかし、上の語りからは、「フジウム」での労働は生計維持の手段だけではなかったこともわかる。Oさんは自分の職業を愛していると語った。離婚を経験したOさんにとっては、「フジウム」は重要な居場所であり、そこでの労働はアイデンティティを形成する活動だったのかもしれない。だからこそ、今もなお「フジウム」工場の跡地で姪のDさんとともに手工芸品生産の事業を立ち上げようとしている。

ここで紹介したのは、20年以上「フジウム」工場で働いた人々である。Sさんは工場で出世し、Oさんは「フジウム」で働き高等教育を受けた。現役の時も引退後も、給料や年金をもらい生活を立て、「フジウム」で働いたことを誇りとする。「フジウム」は模範的な女性労働者を生み出した。

在宅労働者

「フジウム」で働いていたすべての人が、SさんやOさんのように働いていたわけではない。家の外で働くことと、家事・育児の両立が不可能／望まない人々もいた。表2は、在宅労働者の人数を示したものである。ここから、1957年から1984年にかけて、在宅労働者は「フジウム」構成員の半数近く(1957年は半数以上)を占めていたことがわかる。在宅労働者たちは、「フジウム」から支給された材料を用いて自宅で生産し、完成品を「フジウム」に収めていた。

Sさんによれば、「フジウム」で働きだした当初は、家々を尋ねて「フジウム」で働くように説得したという。外へ出るのが難しければ家で働くように説得をした、という。ザイナブさんの娘と嫁は、在宅労働者として働いた経験を持つ(時期などは不明)。彼女たちによれば、家で子供の面倒を見なければならない人や、家の仕事(家事や客人のもてなし)が多い人は在宅労働

者として働いていた。在宅労働者たちは、家の仕事がない夜に作業をしていたという。

公文書資料や聞き取り調査から、「フジウム」には一定数の在宅労働者がいたことが確認された。Sさんの語りからは、「フジウム」では工場で働くのが望ましいとされていたが、不可能な場合は在宅労働が認められていたことがわかる。現時点では、在宅労働をしていた人からほとんど話を聞けていないので、今後聞き取りを行いたい。

職人一家

「フジウム」には数少ない男性労働者も存在した。男性労働者の多くは染色部門やエンジニアとして働いていたようだが、コビルジャン・ムサジャノフ氏(1953年没)のように卓越した技術を持つ男性職人も存在していた。彼は、シャフリサブズ、キタブ地区におけるただ一人の男性チュベチェイカ刺繍師と言われている[Zakharov 1979:19]。彼は、「フジウム」の染色、下絵、刺繍を自宅で手掛けていたという。革命以前から職人として活動していたムサジャノフ氏は、「フジウム」設立初期から職人として関わった。彼の孫の話によれば娘のザイナブ氏とともに自宅で仕事をし続けたという。

ザイナブ氏は1938年頃から父コビルジャン氏の仕事を手伝っていた。彼女もまた「フジウム」で50年にわたり働いた。彼女に関する新聞記事を引用してみよう。

ザイナブ姉は、「フジウム」芸術製品工場の支部で、ちょうど50年誠実な仕事をした。同僚たちは、彼女を尊敬の念と共に、1972年に年金へと送った(退職した)。お姉さんは、61歳になろうとしていても、見た目から誰もこの人の年齢はわからない。とりわけ、弟子たちが彼女を年金へ送るときに伝えた暖かい言葉は、感謝と良い願いを表すもので、この人が若く見えることを示すものである。休むことのない性質のこのお姉さんは、家では座っていることはできない。子供のころから尊敬された彼女のために、工場へと、愛された弟子たち、尊敬すべき人々は楽しみを求め

て急いだ。

最近、私たちは民族工芸を存続させてきたお姉さんと話をした。「私たちの先祖は、絵描きでした」お姉さんは話を始めた。「私は、その時とても若かった。私たちの家では、娘や若い女性が集まって、ドゥッピ、刺繍を縫っていました。私は彼女たちのこの仕事を注意深く見ていました。とりわけ、私の父、コビル・ムサジャノフは布地に模様を描く職人でした。父は私にも、この職業をやさしさと愛情をもって教えました。その時、私の気持ちの中に最も素晴らしい思い——布地に模様を描く望みが現れました。」

(略)

刺繍縫い、私たちの町で、女性たちによって続けられてきた、豊かな伝統の一つ。ザイナブ姉は父親が愛した仕事を受け継いでいる。絵描きの子孫であるこの女性は、素晴らしいデザインをつくり出す才能を持つ。

(略)

[G'alava 1983. 12. 17: Bir Oila baxti]

この記事から、ザイナブさんをはじめ、コビルジャン一家は「フジウム」の生産を支える卓越した技能を持つ職人一家として、称賛されていたことがうかがえる。陶業の集団化過程を調査した菊田[2013]によれば、陶業の集団化は生産場所の限定を伴うものであったという。「フジウム」の事例からは、コビルジャン一家や前項の在宅労働者のように、自宅で生産活動をしていた人々の存在が浮かび上がってきた。コビルジャン一家の場合は父親から娘へ仕事が受け継がれていたことから、家族内での技術継承が維持されていた可能性もある。とはいえ、現段階ではコビルジャン一家がソ連時代を通して自宅で生産を続けていたのかは確かではない¹¹⁾。今後、ザイナブ氏一家より再度聞き取りを行うなどして、調査を進めていく必要がある。

7. まとめ

本稿では、聞き取り調査、公文書、出版物に基づき、シャフリサブズ「フジウム」芸術製品工場の変遷と、労働者たちの実態の一端を記述してきた。現時点で明らかになったことと今後の方向性について述べたい。

¹¹⁾ 菊田氏より、戦時中や80年代は陶業において自宅生産が容認されたこともあったという話を聞いた。

「フジウム」の設立と発展

「フジウム」は女性解放運動の最中に設立された組織で、シャフリサブズの女性たちを自由へ解放するための拠点となることを期待されていた。設立時から80年代半ばにかけて、構成員は増え続けた。その大半は女性であった。ソ連期を通して「フジウム」は、シャフリサブズにおいて、女性のための就労先として機能していたといえる。

働き方の多様性

「フジウム」での働き方は複数あることが明らかになった。「フジウム」で長年働いた模範的労働者たちは、工場で出世したり、高等教育を受けたり、退職後年金を多く受給したりしている。家庭を中心に行われていた手工芸品生産は、「フジウム」設立によって、女性が経済基盤や社会的地位を築く活動に変容した。一方で、在宅労働者たちも一定数存在していたことや、同じ在宅だが、前時代の生産を継続させている(可能性のある)熟練職人一家の存在も浮かび上がった。

「フジウム」における生産活動の多様さは、「フジウム」に期待された役割が複数あったことを示していると推測される。第一に、「フジウム」は、社会主義の進展度合いを象徴するソ連的女性労働者を生み出すことを使命としていた。それが、SさんやOさんなどの模範的労働者の誕生につながった。第二に、「フジウム」は、家の外で働くことが難しかった女性たちのために、経済的基盤をつくることも目指した。第三に、「フジウム」は、女性の「解放」を目指すと同時に、質の高い芸術製品を生み出すことも使命としていた。「フジウム」で作られた製品の一部は、連邦内のコンクールに出品されたり、外国へ輸出されたりしている。それゆえ、コビルジャン一家の様な高い技術を持つ職人たちが、家内で生産を継続できたと推測される。

とはいえ、これらの点は現段階では実証できておらず、今後も調べていく必要がある。「フジウム」において目指された女性の「解放」とはどのようなものだったのか。この点については、設立の経緯や、一見「解放」の理念に反するような在宅労働者の「フジウム」における位置づけに着目して調べていきたい。また、集団化を経て製法や技術がいかに変化したか／しなかったのかという点については、コビルジャン一家から詳しい話を聞くとともに、熟練職人の労働環境や技術に継承に着目して調べていく必要がある。

参考文献

●一次資料

未刊行物

Qashqadaryo viloyati Shahrisabz tumani Davlat arxivi. Fond no.44 "Shahrisabz tumani "Hujum" badiiy buyumlar fabrikasi".

刊行物

G'alava, Bir Oila baxti, 12. 17. 1983.

●二次資料

英語

Keller, S. 1998. Trapped between State and Society: Women's Liberation and Islam in Soviet Uzbekistan 1926-1941, *Journal of Women's History* 10(1): 20-44.

Olcott, M. B. 1991. Women and Society in Central Asia. In W Fierman (ed.) *Soviet Central Asia : The Failed Transformation*. Boulder: Westview Press, pp. 235-254.

Skallerup, T. M. 1990. *Artisans between Guilds and Cooperatives: A History of Social and Economic Change in Russian Turkestan and Soviet Central Asia, 1865-1928*. Ann Arbor, Michi.: University Microfilms International.

ロシア語

Zakharov, C. M, Kh. Khikmatov. 1979. *Shakhrisabz*. Tashkent: Uzbekistan.

Sukhareva, O. A. 2006. *Suzani: Sredneaziatskaya dekorativnaya vyshivka*. Moskva: Izdatel'skaya firma «Vostochnaya literatura» Ran.

日本語

菊田悠. 2013. 『ウズベキスタンの聖者崇敬：陶器の町とポスト・ソヴィエト時代のイスラーム』風響社.

袴田茂樹. 1993. 「コムソモール」川端香男里他監修『ロシア・ソ連を知る事典』(増補版)平凡社, p.216.